

「礼拝という宝物」 一使徒行伝講解説教 44-

使徒行伝 20章 7節～12節

説 教 本庄侑子牧師

パウロたちはトロアスにたどり着きました。かつて何度も道が閉ざされて途方にくれる中、祈りのうちに幻が与えられ、海向こうの町に道が開かれていった思い出の町です。と言っても、いつまでも思い出に浸っているわけにはいきません。ここからエルサレムへ、そしてローマに続く道に出て行かなくてはなりませんでした。

激しい戦いが待ち受けていること必至でした。だけど、避けて通れない。神様に与えられる道だからです。信仰によって進んできたけれど、ふとした時にもう行きたくないと呼ぶ心が暴れ出し、不安に飲み込まれることしばしばだったのではないのでしょうか。

そんな中、彼らは礼拝するために集まりました。週の初めの日、日曜日のことでした。日曜日が休みだったから集まったわけではありません。ユダヤ人の安息日は土曜日でした。それにも関わらず、日曜日に集まる人たちが現れ、どんどん増えていったから、日曜日が休みになっていきました。それまでの間、人々は日曜日、日中は働いて、夕方から集まったようです。そうまでして日曜日にこだわったのはなぜか。それは、日曜日にイエス様が復活されたからです。そして、礼拝の中でパンを裂くようになりました。最後の晩餐の席上で、イエス様がそうするようにとおっしゃったからです。

イエス様が死んでしまった時、弟子たちはイエス様の言葉をすっかり忘れていました。自分を責め、互いを責め合うような思いだけで心がいっぱい、夕暮れ時、深い闇に向かって歩いていました。そんな弟子たちのもとに、死んだはずのイエス様が追いかけてこられ、歩みをそっと共にされました。弟子たちは、それがイエス様だとは気づきません。イエス様は死んで3日目によみがえると何度も聞いてきたはずでした。しかし、聞いてはいても、本当の意味で聞こえていなかったのでしょうか。

そんな弟子たちの前で、イエス様は自らパンを裂いてくださいました。すると、弟子たちはそれがイエス様だと分かったのです。これまで聞いてきた言葉が心に燃え、立ち上がってきた。十字架の死はこの私のためだった。この不甲斐ない自分たちを引き受けるためにこそ、イエス様はご自分の体を裂いて死んでくださった。そして復活して、もう一度会いにきてくださった。

なお、私たちと共にいて、イエス様の御力によってやり直させてくださる。

そうして教会は、イエス様が復活された日曜日になると、仕事を終えた夜でも集まるようになりしました。そして、イエス様のお言葉に従ってパンを裂いたのです。混沌と闇、死だけが支配しているような現実の中にあっても、共に集まり、パンを裂くと、それらの中にも、あのイエス様が共にいてくださる、まだ終わりではない、と信じることができました。

その礼拝の中で、ユテコが眠りこけて、三階から転落してしまいました。抱き起こしたら、もう死んでいました。するとそこにパウロが降りていきます。そして、ユテコの上に身をかがめて、抱きあげて言いました。「騒ぐことはない。まだ命がある。」(10節)一同は生きかえったユテコを連れかえり、ひとかたならぬ慰めを与えられて、それぞれの道に出て行ったのでした。

約1年前、主任牧師を祈り求めつつも道が閉ざされ続けていた頃、礼拝で使徒行伝9章のタビタの物語をお聞きしました。これはルカによる福音書でイエス様がヤイロの娘を生き返らせた話とよく似ていました。ユテコの話も、それらと重なってきます。昨年、私たちは確認させられました。いい牧者が遣わされたら、あるいは私たちがもっと成長したら、前進できるのではない。私たちはイエス・キリストの教会。私たちの出来不出来ではなく、イエス様の十字架と復活にあらわされた神様の御力によって立てられ、今も一緒に用いていただいているのだと。

あれから一年。色んなことがありました。なおここから、アドヴェントから始まる一年に出て行かなくてはなりません。しかしだからこそ、私たちはこうして日曜日に集められました。復活の主が、ご自身の体を裂き、宣言してくださいます。「騒ぐことはない。まだ命がある。」もう終わったと思える最悪の出来事にも、混沌とした闇が覆っているような場所や私たち自身にも、イエス様ご自身が降りてきて、身をかがめ、抱きあげて、新しい創造のみわざをなしてください。ひとかたならぬイエス様の慰めが、これからも世界中を包み込み、大阪教会、私たち一人ひとりの歩みを導いてくださいます。

(記 本庄侑子)